

バードリサーチ ニュース

2013年6月号 Vol.10 No.6



Ficedula narcissina
Photo by Toshifumi Miki

活動報告

夏鳥の飛来とさえずりの時期に地域差 ～種ごとに異なる傾向～

植田睦之

季節前線ウォッチやライブ音の聞き取り調査にご協力いただき、ありがとうございます。これらの結果から今年の夏鳥の状況が見えてきたので、ご報告します。

南は早く、北は遅かったツバメ

今年の春は、例年になく、桜が早く咲いたことが話題になりました。ツバメも西日本には、やはり例年になく早く渡来しました。西日本に続々とツバメが渡来した3月中旬までは暖かだったのですが、下旬になると平年並みになり、4月には逆に寒くなりました。この気温の変化を反映してか、関東は例年よりやや早い程度、東北は逆に例年よりもかなり渡来が遅い状況でした(図1)。春は寒暖の差が激しいですが、こうした寒暖差によってツバメの飛来時期に地域変化ができるようです。

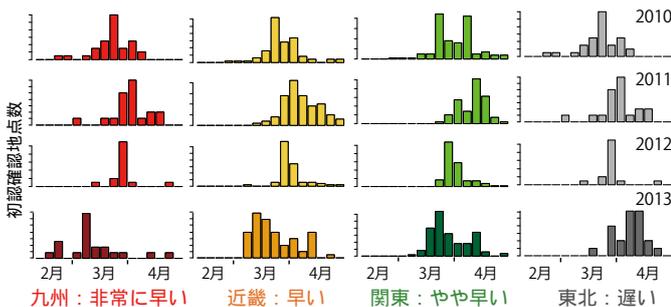


図1. 各地域のツバメの初認日の頻度分布。棒グラフのピークが左にある年は渡来が早く、右にある年は渡来が遅かったことを示す。

早かったホトトギスとカッコウ

ツバメよりも遅い時期に飛来するカッコウ類の2種は、ツバメのように南から徐々に渡来するわけではなく、全国に一斉に飛来します。今年も5月中旬に全国から情報が寄せられました。この渡来時期は2010年以降、最も早いものでした(図2)。5月の気温は例年並みで、特段暖かかったわけではありません。何に起因するのかまだわかりませんが、カッコウ類はもともと飛来時期の年変動の大きな鳥です。今後も引き続き情報を収集し、何が渡来時期に影響するのかを明らかにしていきたいと思えます。

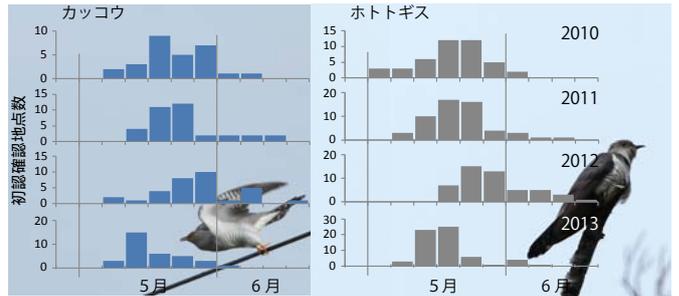


図2. カッコウとホトトギスの初認日の頻度分布。[Photo by 三木敏史]

さえずりの活発な時期が短かった？

埼玉県秩父演習林や長野県志賀高原から配信している森林のライブ音の聞き取り調査からは、さえずり頻度の高かった時期がわかります。3年間聞き取り調査を続けている秩父演習林の代表的な夏鳥のコルリとキビタキについてみると、過去2年よりもさえずりが活発になる時期が遅く、また、すぐに頻度が低くなっている様子がうかがえます(図3)。今、森林の鳥のモニタリングのために、全国各地でセンサスをしています。鳥のさえずりが不活発のように感じますし、調査をお願いしている何人かの方からも同様の報告をいただきました。今年のはさえずりピークが短いために、さえずりが不活発に感じるのかもしれませんが、今年も各地にICレコーダを設置し



写真. コルリ。[Photo by 三木敏史]

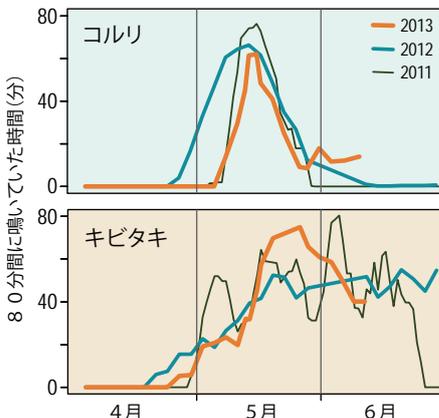


図3. 秩父演習林での2011年からのコルリとキビタキのさえずり頻度の季節変化。

て日の出時刻のさえずり状況をタイマー録音しているので、それらのデータを整理して、本当にさえずりのピークが短かったのか、また、それがなぜなのか明らかにしていきたいと思えます。

海外情報

オレゴンわくわく鵜オッチングツアー ～北米でのミミヒメウ研究視察報告～

筑波大・院・生命環境科学研究科 熊田那央

バードリサーチの支援を受けて4月23～30日まで、ウ類の保護管理の情報収集のために渡米しました。その際、アメリカ北西部オレゴン州のアストリアで、ミミヒメウの営巣地や調査の様子を視察してきましたので、ご報告します。

北米のミミヒメウ事情

北米に生息しているウの仲間で、カワウと同様に被害問題が起きている種がミミヒメウです。ミミヒメウは北米全域に広く分布していますが、その個体数の動向や、被害の内容がロッキー山脈をはさんで東側と西側で少し異なります。東側ではミミヒメウの個体数が現在も増加しており、養殖池での食害が問題となっています。そのため、北米東部ではミミヒメウの個体数管理の政策が始まっています。一方で、今回視察を行った西側の地域では、川を下るサケ科の稚魚の食害が問題となっていますが、イーストサンド島 (East Sand Island) というコロンビア川河口の島にあるコロニーを除くと北米西部のミミヒメウの個体数は今のところあまり増加していないようです。これから西部のミミヒメウ個体群が増加するか不明で逆に減少する心配もあるのではまだ個体数管理は行われておらず、管理を行うかどうかを決めるための調査や実験が行われている段階です。西部のミミヒメウの調査を行っているのが、オレゴン州立大学のダン・ロビー教授の研究グループです。この研究グループに現在ポストドクターとして在籍している鈴木康子さんに今回の視察の案内をしていただきました。オレゴン州立大学の研究グループではミミヒメウや、ミミヒメウと同様にサケ科の稚魚への食害が問題となっているオニアジサシについて、その生態やサケ科魚類との関係を研究しています。



写真1. ミミヒメウ(左)と同じくイーストサンド島で繁殖するオニアジサシ(右)。調査スタッフはくちばしに加えた魚の種やサイズを記録します。

米国の調査体制はスケールが大きい！

今回調査を見せていただけてとても驚いたのは、その研究体制です。オレゴン州立大学の研究グループには、鈴木さんのようなポストドクや学生ももちろんいるのですが、調査を行っているほとんどの人は雇用された調査スタッフです。彼らの中には、調査スタッフとして経験を積んでから学生として研究を始める人もいますが、そういう

人は少数派だそうです。イーストサンド島で仕事があるのはミミヒメウがこの地域で繁殖している夏期のみなのですが、北米の大学では、このような調査スタッフを多く雇って研究しているグループがたくさんあるので、ひとつの調査は短くても、いろいろな生物の調査を渡り歩きながら生活することが可能だそうです。中には夏期は調査スタッフ、冬期は大工さんといった人もいて、日本の研究室ではあまり見かけない面白いシステムだと思いました。

20代から30代の調査スタッフは研究室が借り上げた一軒家で共同生活を行っています。今回の視察期間中の宿はこの家のリビングルームを間借りさせていただいたのですが、この家では最大13人が生活し、調査を行っていました。アメリカの同世代の人達の暮らしぶりが垣間みられてとても楽しい経験でした。日本のカワウ調査グループにはビール好きが多いですが、こちらの調査スタッフもみんなビールが好きで、毎日の調査から戻ったらすぐにビールを開けてくつろいでいました。それと一緒に食べているのが甘い砂糖がかかったドーナツだった時は衝撃でしたが…。

オレゴン州立大の研究グループでは、このような調査スタッフが集まる拠点が他のミミヒメウの調査地にもいくつかあるそうです。1つの研究室で、こんなにもたくさんのスタッフが関わっているプロジェクトを運営しているのにとっても驚きました。



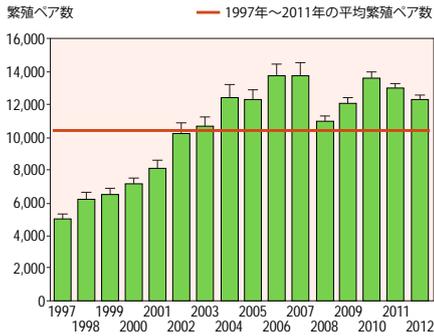
写真2. 調査スタッフが滞在するアストリアの家での記念撮影。

島での素敵な調査生活

調査スタッフたちは毎朝、家から車で10分ほどの船着き場からボートに乗ってイーストサンド島へと向かいます。島まではボートで5分程度。ボートから降りるとまず向かうのが、調査スタッフがウェザーポートと呼んでいる大きなテントです。そこには調査道具などが置いてあり、夜間滞在して調査を行うスタッフ達のために簡単な調理設備なども備え付けられていました。島の主要な移動経路には木道が作られており、ウェザーポート以外にも、夜間滞在用や解剖用のテントや、キャンプファイヤーの場所なんでものまで作られていました。これらは調査スタッフ達がミミヒメウの繁殖が始まり調査が本格的に始まる前の準備として整えるそうで、調査を快適にスムーズに行うためにいろいろな工夫がされているのがよくわかりました。

この島では毎年平均で10,000ペアのミミヒメウが繁殖を行っています。また、ミミヒメウだけではなく、オニアジサシも繁殖を行っており、ここにいるスタッフは主にこの2種のモニタリングを行っています。どちらも地上営巣を行っており、営巣地を見下ろせる観察塔と、人が鳥たちに姿を見られずに観察塔に行くためのトンネルが営巣地に作られています。トンネルは木製で高さ70cm、幅1mほどの通路になっており、両脇を寒冷紗で覆ってあります。コロニー内を横断するように作られており、トンネルの中からは、寒冷紗を挟

海外情報



近年は安定してきているものの、イーストサンド島は北米西部では唯一ミミヒメウの個体数が増加していた営巣地(左: Bird Research NorthwestのWebサイト <http://www.birdresearchnw.org/> の図をもとに作図)。繁殖場所を制限する実験として、昨年まで利用していた営巣地からのミミヒメウの追い出しが今年から行われ、現在も定期的に調査スタッフが見回りをすることでミミヒメウが戻ってこないようにしている(右)。また、この追い払いによって他の営巣地への分散がおこるかどうかを調べるために、衛星追跡も行われている。



んでとはいえミミヒメウが目の前10cmで抱卵したり、ぼーっとしたりするのが見られます。カワウは警戒心が強い鳥ですが、ミミヒメウも同様で、同じ島で繁殖するオニアジサシの観察塔が窓がなく直接観察できる作りになっているのに対して、ミミヒメウの観察塔のほうはマジックミラー越しに観察するようになっています。そんなミミヒメウ達がすぐ目の前でみられるトンネル内は私にはたまらない場所でした。トンネルにはほとんど布でふさがれた窓が作られています。これは、夜間に布をまくって成鳥のミミヒメウを捕まえ、発信器や足輪を装着するための設備です。窓がある場所にタイヤを置いて巣材を置いておくと、ミミヒメウがそこを巣として使ってくれるので、捕まえやすいという仕組みです。1列にならんだタイヤに1ペアずつちょこんと収まっている様子はなかなか可愛らしい光景でした。

トンネルを抜けて観察塔の2階に上ると、360度、全てがミミヒメウの営巣地に囲まれた素晴らしい光景が広がります。ここから個体数のカウントや、繁殖成績、足輪の再確認などの調査が行われています。また、近年ハクトウワシの個体数が増え、この島でもハクトウワシによる攪乱が増加しているの、攪乱がいつ起こったかなども記録しているそうです。私が視察をした期間中にも、ミミヒメウの成鳥が一羽ハクトウワシに捕食されていました。この調査を担当する人は、朝の



写真3. 上: 観察塔から見えるミミヒメウの営巣地。奥にもう1つの観察塔、手前に夜間捕獲の為にトンネルが見えます。下: トンネル内部。手前の黒い部分が寒冷紗、その先の木製の壁に張られた布の部分が、ミミヒメウを捕獲するための窓。



写真4. 左: 観察塔での調査の様子。手にもったタブレットにデータは全て記録している。右: 調査スタッフが参照するマニュアル。

カウントから日中の繁殖調査、ハクトウワシの観察、足輪の再確認、夕方のカウントまでを観察塔に1日こもって、1人で行いません。調査スタッフが入り替わることもあるので調査方法は分厚いマニュアルに全てまとめられ、同じように調査が行えるようなシステムが作られています。また、調査開始時や、調査が始まって軌道にのったころなどで、何回かは研究室のメンバーが調査スタッフ達の記録の取り方などの確認のために調査地に来て調整を行っています。今回私の視察の際にも鈴木さんがその確認を行っていました。記録は全て専用のタブレット端末に行ない、調査が終わって充電器に戻すと自動的にデータが研究室と同期され、調査スタッフ達が後でデータ入力をするといった手間がほとんどない仕組みが作られていました。

サケ科稚魚を守るために

イーストサンド島を含めた北米西部のミミヒメウについては、前述したようにまだ個体数管理を行うかどうかを決めるための調査の段階であり、個体数管理ではなく、食性調査を目的とした捕獲が行なわれています。捕獲の際には、島に帰ってきた群れの一番後ろを飛行する個体を狙って撃つそうです。これは、飛ぶのが遅い後ろを飛んできた個体を撃つことで、できるだけ空胃の個体をさけるためだということでした。捕獲後の解剖は基本的には日本で行われているカワウの解剖と同じ手順で、体重や全長などの計測をした後、消化管の摘出や性別の記録などを行っていましたが、驚いたのは胃内容物のサンプリングの丁寧さでした。解剖器具などは全て1個体毎に洗浄し、魚の細かい骨まで取り残さないように、食道から胃までへらでこそげとって丁寧にサンプルを集めていました。

この島での調査の見学以外にも、コロンビア川で繁殖しているミミヒメウのカウント調査や、サケ科魚類のための魚道のある巨大なダムとそのそばにつくられた養殖場の見学などもしてきました。また、河川ではボートを使ったミミヒメウの追い払いも見学しました。調査には多くの人が関わり、追い払いや養殖などについても、本当にたくさんの人や資源が使われており、コロンビア川でのサケ釣りというものがこの地域の人々にとってとても大事にされているということが強く伝わってきました。

川の大きさから調査の方法まで、なにを見てもその規模の大きさ、関わっている人の多さにびっくりしっぱなしでしたが、論文を読んでいただけでは全く想像のできなかった状況を実際に見学できたことは本当に楽しい経験でした。

ハイタカ 英: Eurasian Sparrowhawk 学: *Accipiter nisus*

1. 分類と形態

分類: タカ目 タカ科

全長:	♂ 302-327mm	♀ 372-402mm
翼長:	♂ 204-217mm	♀ 240-257mm
尾長:	♂ 150-164mm	♀ 183-200mm
ふ蹠長:	♂ 52.0-56.5mm	♀ 57.0-63.6mm
嘴峰長:	♂ 13-15mm	♀ 16-18mm
体重:	♂ 107-138g	♀ 206-264g

※ふ蹠長はAbe (2007), 他は榎本 (1941) による。

羽色:

オス成鳥は、頭部から尾まで暗青灰色、喉から腹部は白地に濃いオレンジ色が入るが、色の濃淡には個体差がある。非常に短い白色の眉斑があるが、眉斑がない個体もある。目はオレンジ色か黄色。メス成鳥は上面がオスよりも褐色味を帯び、細い白色の眉斑がオスよりも目立つ。腹部は白地に茶色か濃いオレンジ色の細かい横縞が入るが、個体差がある。目は黄色。幼鳥はメス成鳥に似るが、胸には暗灰色または暗褐色の太い横斑や縦斑が目立つ。



写真1. ハイタカのオス(上)とメス(下)。

鳴き声:

あまり鳴かないが、繁殖期には雌雄ともに「キッ、キッ、キッ、キッ」または「キーキーキーキー」と鳴く。この声は警戒しているときに発し、オオタカよりも少し高い。餌を持ってきたときにオスは「キューキューキュー」と低い声で鳴き、メスは「ケオー、ケオー」と鳴き、餌渡しをうながす。ヒナは「ピー、ピー」と鳴く。

2. 分布と生息環境

分布

ユーラシア大陸およびアフリカ大陸の北部の広い範囲で繁殖する。国内では北海道および本州で繁殖が確認されている。ハイタカは留鳥性が強いとされるが、冬期には平地や農耕地に移動したり、より南に渡るものもある。

生息環境:

森林に強く依存し、山地から平地、連続性のある広大な天然林から農耕地の分断化された孤立林、防風林のような人工林、市街地の大きな公園や墓地にある林など、さまざまな森林環境に生息する。特に、20年～50年生の若齢段階の針葉樹林を好む。

3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

繁殖システム: 繁殖期 非繁殖期

一夫一妻で繁殖する。テリトリーは連続的に使用されるが、同じつがいも継続的に維持しているとは限ら

ない。テリトリーの餌量や前年の繁殖の成否によって、つがい相手が変わることは多いようである。

巣:

本州、北海道ともに3～4月に造巣を開始する。巣はアカマツ、カラマツ、スギなどの針葉樹に造られることが多い。北海道では、トドマツやストロブマツなど常緑針葉樹に巣が多くみられる。地上3～30mの高さで、樹冠に近い位置に巣は造られる。ハイタカは毎年新しく造巣するのが普通であるが、古巣を使うこともある。巣の大きさは直径45～70cm、厚さ約20cm、内径15～30cm、産座の深さ3～7cmくらい。



写真2. ハイタカの営巣環境。中央やや上に巣がある。

卵:

一腹卵数は日本では4～5卵とされるが、北海道の石狩平野では2～6卵(平均4.3)、イギリスでは3～7卵(平均4.9)の報告がある。

抱卵:

抱卵期間は日本では4～5日とされるが、北海道の石狩平野では2～6日(平均4.3)、イギリスでは3～7日(平均4.9)の報告がある。

抱卵・育雛期間、巣立ち率:

産卵は本州の4月末～5月中旬に対して、北海道では5月中旬～6月中旬とやや遅い。卵は31～42日の抱卵期間で孵化する。ヒナは孵化後24～30日で巣立ち、親から餌をもらいながら巣立ち後20～30日で独立する。ヒナ数は1～5羽、巣立ち幼鳥数は1～4羽が北海道で観察されている。

4. 食性と採食行動

小型～中型の鳥類を捕食する。ほとんどは小鳥類だが、種類や割合は地域によって異なる。北海道の石狩平野では、カワラヒワ、アオジ、ムクドリが多かった。小型の哺乳類もまれに捕食する。石狩平野ではネズミ類が記録されており、十勝平野では食痕にエゾリスがみられることがある。小型猛禽類のハイタカは、閉鎖した林内でも餌動物を追跡できる。木の枝にとまり、獲物を見つけると飛び立って捕らえる。石狩平野では空中で追跡するハンティング行動が多く観察されており、飛翔中や飛び立った小鳥を空中で捕獲する。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 営巣環境選択に対するオオタカの影響

ハイタカの巣は樹木密度の高い若い林で見つかることが多い。また老齢な林よりも若齢な林で営巣した方が、繁殖成績がよいことも報告されている(Newton 1991)。このような林を好む理由として、体サイズの小さいハイタカは閉鎖した林内でも器用に飛翔することが可能で、実際に頻繁にハンティングに利用していることから、採食環境として適しているという可能性と、開けた森林を好み、ハイタカの捕食

者とされているオオタカからの捕食を逃れるためであるという可能性が考えられている(Newton 1986).

ハイタカが樹木密度の高い林で営巣することが、採食環境を含めた生息環境として適しているからなのか、オオタカによる捕食から逃れるためなのかを確かめるために、北海道の石狩平野と十勝平野でハイタカとオオタカの営巣林の樹木密度を比較した。その結果、両地域ともにハイタカがオオタカよりも樹木密度の高い森林に営巣することは共通していたが、2地域間のハイタカの営巣林の樹木密度は大きく異なっていた(表1; 平井ほか 2012)。イギリスでは、ハイタカはオオタカがいると樹木密度の高い林で営巣するが、オオタカがいなければ樹木密度の低いところで営巣することも報告されている。これらのことから、ハイタカの営巣環境選択にはオオタカとのすみ分けが重要であると考えられる。

オオタカはハイタカよりも大きな中型猛禽類である。ヨーロッパにおける研究で、オオタカはハイタカの主要な捕食者だと報告されており(Newton 1986)、十勝平野でもオオタカによるハイタカの捕食が確認されている(Iwami 1996)。オオタカには飛翔の難しい密生した林を利用することで、ハイタカはオオタカによる捕食を回避していると考えられる。また、石狩平野での調査によれば、ハイタカは小型鳥類を中心に捕食し、オオタカは中型の鳥類を主に捕食しているが、両種の食性は重複しており、食物において競合している可能性もある。

種	樹木密度(本/ha)	
	石狩平野 (平均±SD)	十勝平野 (平均±SD)
ハイタカ	1882.1±502.5 ^a	940.0±575.0 ^d 1126.8±477.2 ^f
オオタカ	1169.3±344.0 ^a 1018.8±282.0 ^b	489.8±130.2 ^c 523.5±171.0 ^d 568.2±192.6 ^e

表1. 石狩平野および十勝平野におけるオオタカとハイタカの営巣林の樹木密度。a: Abe et al. (2007), b: 農林水産技術会議事務局 (2003), c: 鈴木 (1999), d: 平井ほか (2008), e: 平井・柳川 (未発表), f: 平井・柳川 (2012)



写真3. オオタカ

林の多くは細長い帯状の防風林や小面積の孤立した人工林である。このような環境は必ずしもハイタカの生息に適した環境ではないが、ハイタカだけでなくオオタカ、ノスリ、トビ、チゴハヤブサの営巣も確認されており、猛禽類の生息地として北海道の平野部における人工林の重要性は高いといえるだろう。現在、北海道の人工林は伐期を遅らせ、若い森林の面積が減少し、壮齢化の傾向にある。人工林を利用する多様な生物の生息環境を維持するためには、若い林から林齢の進んだ森林まで偏りなく存在するような森林管理を行なう必要がある。

6. 引用・参考文献

Abe, F. 2007. Ecological studies on Northern Goshawks and Sparrowhawks during breeding seasons on the Ishikari Plain, Hokkaido, Japan. Ph D dissertation, Hokkaido Univ, Sapporo, Japan.
 榎本佳樹. 1941. 日本産鳥類の体の大きさ. 日本野鳥の会大阪支部, 大阪.
 Fergusson-Lees, J. & Christie, D. A. 2001. Raptors of the world. Houghton Mifflin Company, Boston.
 平井克亥・瀧本育克・柳川久. 2008. 北海道十勝平野におけるオオタカとハイタカの営巣環境とその保全. 第7回「野生生物と交通」研究発表会講演論文集: 51-56.
 平井克亥・安部文子・柳川久. 2012. ハイタカの研究史とそれに基づく保全への提言: 特に営巣環境について. 第11回「野生生物と交通」研究発表会講演論文集: 19-26.
 平井克亥・柳川久. 2012. 北海道十勝平野におけるハイタカの営巣木および営巣林分の特徴. 日鳥学誌: 142-147.
 北海道猛禽類研究会. 2009. 北海道の猛禽類—クマタカ, オオタカ, ハイタカ, ハチクマ, ハヤブサ—2009年版. 北海道猛禽類研究会, 北海道.
 Iwami, Y. 1996. Some prey items of three species of hawks (Goshawks *Accipiter gentilis*, Sparrowhawks *A. nisus* and Buzzard *Buteo buteo*) in Tokachi district, eastern Hokkaido. Jpn. J. Ornithol. 45: 37-38.
 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 図鑑日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
 Newton, I. 1986. The Sparrowhawk. T & AD. Poyser, UK.
 Newton, I. 1991. Habitat variation and population regulation in Sparrowhawks. Ibis 133 suppl. 1: 76-78.
 農林水産技術会議事務局. 2003. アンブレラ種であるオオタカを指標とした生物多様性モニタリング手法の開発に関する研究. 農林水産省農林水産技術会議事務局, 東京.
 鈴木貴志. 1999. 北海道十勝平野におけるオオタカ *Accipiter gentilis* の営巣環境. 日鳥学誌 48: 135-144.

執筆者

平井克亥 帯広畜産大学 野生動物管理学研究室 研究員

● ハイタカを保全するために

ハイタカは、ヨーロッパ(特にイギリス)ではよく研究されているが、日本でのハイタカの情報は限定的できわめて少ない。特に生息環境に関して、国内では北海道の石狩平野や十勝平野で行なわれた研究があるのみで、北海道内においても山間部の調査はほとんど行なわれておらず、山地での繁殖が多い本州では断片的な情報しか得られていない。これは山地では巣の発見が困難であるためだと考えられる。日本国内全体でハイタカの営巣環境を議論し、地域レベルの保全目標を立てるためにも、これまでに得られていない北海道の山間部や本州におけるハイタカの知見が不可欠である。

ハイタカは営巣および採食環境を森林に強く依存している。北海道の平野部は、森林の少ない農業地帯であり、森

北海道の十勝平野でハイタカ、オオタカ、ノスリの巣を見つけ、おもに営巣環境を調べてきました。これからも、3種の巣の観察を継続し、巣の分布や営巣密度、巣間距離、繁殖成績など、できるだけ長期的に基礎データを集めたいと思っています。また、十勝平野では細長い防風林などの人工林に3種が営巣しているので、営巣環境の保全が可能な人工林管理にも興味を持っています。いろんなことに手を出して、どれも手が回らずに中途半端になっていますが、少しずつ進めたいと思っています。



図書紹介

羽 進化が生みだした自然の奇跡

ソーア・ハンソン 著 黒沢令子 訳 / 白揚社 定価 2,600円(税別)

羽一枚の奥深さに改めて感嘆しました！今までも羽のことを調べる中で様々な驚きに触れてきましたが、この本は私の知的好奇心を満たしてくれました。例えば、カワウやサケの羽は、なぜ水を含むのか？キレンジャクや稀にヒレンジャクに生じる蠟状突起(ワックスウイング)の正体は何か？粉綿羽の機能は！？そんな疑問が次々に解決したり、さらに悩みが深くなっていくこと請け合いです。どうです！？読んでみたくなりませんか？

本の構成は①進化②綿羽③飛翔④装飾⑤機能の5部から成り、それぞれが数章ずつに分かれています。羽について最もホットな話題である進化の部の各章では、ダーウィンに始まり、始祖鳥、中華竜鳥、羽毛恐竜化石、羽進化の発生モデルを取り上げ、その理解を助けてくれます。また、飛行の地上起源説と樹上起源説の章では、WAIR(翼に補助された傾斜走)と言う強力な進化仮説を分かりやすい挿絵と共に取り上げており、進化の過渡期に辿ったであろう道を羽ばたく鳥の祖先が頭の中に浮かびます。

また、人間による羽の利用についても装飾の部で多くの章を費やしており、羽ペンに始まり、羽楊枝、19世紀の爆

発的な羽ブームが、鳥類に及ぼした甚大な影響、1912年当時、目方で羽より高価な物はダイヤモンドだけだったという話や1900年には米国労働者の300人に1人以上が婦人帽産業に従事していたという統計結果など、多くの鳥が羽目的で乱獲され絶滅のふちに追いやられてきた羽の暗黒史にも深く迫ります。

他にも、狩猟者が羽音でカモを識別する話や、タシギやアメリカヨタカの薄気味悪いヒュルヒュルという音が羽から発せられている話、さらにはカイツブリの羽食など、羽好きのみならず鳥好きには、思わずニヤリとするような興味深い話が満載です。2013年3月号の図書紹介「鳥」と同じく本書もおなじみの黒沢令子さんの訳で、その読みやすさは滑らかな羽の様です。構造色の羽を思わせるような美しい帯と標題紙を手に取り、進化が生みだした自然の奇跡「羽」を御覧ください！お勧めです！

【石亀明 日本野鳥の会東京、NPO法人行徳野鳥観察舎友の会】



活動報告

カワウの保護管理ガイドライン&手引き パブリックコメントが実施されています！

高木憲太郎・加藤ななえ

都道府県でカワウの特定鳥獣保護管理計画(以下、特定計画)を作成する際の参考にと、環境省から「特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル(カワウ編)」が発行されたのが2004年のことです。あれから9年が経過しました。その間に、関東と中部近畿に2つの広域協議会が設立され、5つの県で特定計画やそれに準じる計画が作られました。また、ビニール紐を用いた簡便なねぐら除去技術や、ねぐらの分布を管理することで水産被害を減らす方策、シャープシューティングによる個体数調整の技術などが培われた一方で、東北地方や中国四国地方などでもカワウによる被害問題の解決が求められるようになりました。そこで、環境省

では、こうした状況の変化を踏まえてマニュアルの改訂に乗り出し、バードリサーチでは昨年度、環境省からの委託を受けてこのマニュアルの大改訂をお手伝いしました。200ページの大著になってしまいましたが、ガイドラインと手引きを分けることで、時間がない方にも、要点を掴んでもらえるようになっていきます。タイトルは、マニュアル改め「特定鳥獣保護管理計画作成のためのガイドライン及び保護管理の手引き(カワウ編)(案)」。この改定案に対するパブリックコメントが6月14日から7月13日まで行われています。1年という短期間での取りまとめだったので、至らぬ点もあると思います。忌憚のないご意見を環境省へお寄せください。パブリックコメントを受けた修正にもバードリサーチは責任を持ってかわり、ご意見を反映できるよう努力します。

改定案は環境省の報道発表資料に掲載されています。

環境省 報道発表資料 平成25年6月14日

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=16776>

バードリサーチニュース 2013年6月号 Vol.10 No.6

2013年6月27日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之 編集者: 青山夕貴子・高木憲太郎

表紙の写真: キビタキ